

イタリアスタディツアー報告

亀岡正陸・島田香

1. はじめに

異文化理解や国際理解教育の推進は、多角的な幅広い視野を持つ小学校教員、保育や福祉の専門職の養成を目的とする教育福祉心理学科にとって重要な事項の一つである。そのような意義から本学中長期計画にこの企画も位置づいている。

平成27年2月21日（土）より平成27年3月2日（月）までの8泊10日間、臨床心理学部の学生12名（教育福祉心理学科10名、臨床心理学科2名）を教育福祉心理学科の教員2名で引率し実施した。

このスタディツアーは、準備と計画に2年間に要している。担当教員による2回の渡伊によってようやく協力学校・施設を決定することができた。また、本研修参加の学生には、危機管理指導や現地教育事情を含め都合4回の大学における十分な事前研修・事前指導を積んで実施した。

尚、本企画は公益財団法人大学コンソーシアム京都教育開発事業部 国際連携事業の一環である「平成26年度 海外留学派遣プログラム開発支援事業」の一つとして採択された。今回報告するスタディツアーはその補助金を活用して実現したものである。

本稿の目的は、①イタリア教育施設訪問研修の概要報告、②スタディツアーの事前・事後に

実施した国際理解測定尺度による質問紙調査結果の分析、③帰国後学生から提出されたレポート内容をカテゴリー分類した結果報告、の3点である。

2. 教育施設の概要とその訪問研修内容について

(1) ISTITUTO GONZAGA（カソリック系私立幼稚園・小学校）訪問

ミラノで屈指の伝統を誇る小学校（ISTITUTO GONZAGA）（幼稚園、中学校、高等学校併設。小学校校長は幼稚園園長兼務）の1日教育実習が許可された。この学校はカソリック系の私立学校であり、一般の公立学校では、学費の問題や、様々な民族風習に起因する課題を少なからず持っている。異なる背景を持つ子ども達が同時に同じ教室で学ぶ環境設定の中で、どのように学力問題について課題を解決していくのか苦



慮している側面があると言える。しかし、一般的には私立の学校園は、入学時点で一定の条件があるため、効率的な教育を実施している。同学校園は学力向上に力を入れ、英国・ケンブリッジ大学とも提携し、効果を上げている。

将来的には、イタリアの公立小学校の実態やかかえる課題、その克服のための努力などについて考察する研修も企画する必要があると考えるが、今回は、ミラノの先進的な学校の取り組みを研修することにした。

例えば同小学校では、全学年週2時間ずつ英語の時間がある。イタリアでこれまで遅れがちであった英語教育をパイロット的に重点を置いて推進し成果を上げている。このことは日本の現在の英語教育の課題と合わせ考究することが可能で、有意義であると考えた。

また同小学校の教員の多くは英語が理解できるが、彼らにとっても外国語である英語は、必ずしも流暢とは言えない。今回の研修ではそのことがかえって学生たちの英語を使う場、勇気をもってコミュニケーションを図る場として設定でき、成果を期待できると考えたのである。

ISTITUTO GONZAGA として、学園長等は京都の文化や学校教育に強い関心を持っていることもあって、今後は参観だけでなく、教育実習的な参加も歓迎の意向を示している。もし、京都文教大学との提携が実現することがあれば、



有意義な学校間の文化・教育交流に発展することが期待される。

今回は、まずは全学級の参観と校長の1時間程度の学校紹介・講話のあと、小学校の各クラスに2名ずつ、部分的な実習生として受け入れてもらえた。案内役は、ISTITUTO GONZAGA の高等学校の学生で、本学学生とチームを組んで、小学校で授業をすることとなった。

授業は、イタリア語での自己紹介の後、プレゼントとして持参した色紙や千代紙の折り方を英語で教えた。教員とは他の日本文化についても話す機会があり、子ども達や教員との交流を深めることができた。この様子は大学HPのfacebook(2月24日～26日分)に公開した。

また、衛生上の観点から、通常イタリアでは部外者に給食の様子は見せないが、今回は学校園長の特別のはからいで、給食の様子も参観することができた。また学生及び引率教員と現地教員との懇親会の設定もISTITUTO GONZAGA 側から申し出があり、篤い歓迎の心を感じることができた。

(2) Casa dei Bambini モンテッソーリ実践校 (幼稚園・小学校) 訪問

CASA Dei Bambini Scuola Montessori は、イタリアが生んだ最高の教育者マリア・モンテッソーリが創始した「子どもの家」と言われる教育施設で、幼・小一貫校である。

子どもの実態に合わせた異年齢集団による、教師が教えないという独自のモンテッソーリメソッド(感覚教育)は、日本の教育を再考する上で極めて有用な示唆を与えてくれる。集団性を重視する日本の教育観・価値観との違いについて深く考察するきっかけになるとともに、様々な教育場面での感覚重視の思想とその実践は、保育士、小学校教員、PSW をめざす学生達にとって大きな価値のある研修となった。



園長による実践的な教育講話も有意義であった。(バイリンガル実践の姉妹校に勤務する日本人教師を通訳も兼ねて当日招聘する園長の配慮が大変有難かった。)以下にその時の講話、研修事項をまとめる。

CASA Dei Bambini Scuola Montessori は1984年ミラノにて、学校を教育の場と考える保護者と教師のあるグループの手によって生まれた。彼らを選んだのがモンテッソーリの教育方法であり、1987年には現在の場所に移転し、保護者協同組合によって管理され、教師会によって経営を行う当初の形を崩さずに今現在まで活動している。

【幼稚園部】

2歳半から5歳までの子ども達を集めた4クラスで構成され、異年齢の子どもが同じのクラスの中で、年少の子は年長の子を見て学び、年長の子は年少の子を常に助ける事でお互いに経験を高めていく事ができる。担任の先生、日常活動を教える教師と外部の専門家が子ども達の成長を促している。

【小学校部】

6歳から11歳、各クラス約20人、ここでは教育は義務や競争ではなく、自由な選択と個人の必要性を重点におき、子ども達の自己教育を目標としている。

【活動】

- ①日常的な実践生活の練習
- ②芸術を通しての表現方法
- ③音楽による聴覚とリズムの発達
- ④運動による精神の発達
- ⑤実際の経験を通した英語の習得

【その他】

教師は全員モンテッソーリ教員資格取得者で専門家である。毎年教育に関する研修を受けている。保護者に向けては、1年で3回クラスミーティングと個人面談を設けている。その他1年で4回保護者協同組合の集会を設けている。

(3) Istituto dei Cechi di Milano (Dialogo nel Buio) 訪問

Istituto dei Cechi di Milano はミラノにある代表的で著名な盲学校である。

ここは、完全なブラインド体験ができる施設「Dialogo nel Buio」を附属で持っており、視覚に障害のある人たちと同様の全く物が見えない状況下での買い物や、飲食、あるいはボートに乗ったりする体験は是非、教育・福祉を学ぶ学生には味わわせたいと考えた。メモをもとに以下その時の様子を再現する。

Dialogo nel Buio は「闇との対話」という意味である。

ここは、完全に光のない闇の中で白杖を使い1時間にわたる漆黒の旅をするという本格的なブラインド体験施設である。(自由に参加することはできず、事前の予約が必要である。参加人数から2つのグループに分けて、時間差をつけて参加するという工夫が必要であった。)施設に入る前にオリエンテーションがまずなされる。ぶつかったりすることもあるかもしれないので、メガネも時計も外さなければ参加できない。(当初は、持参のワイヤレス無線機でガイドの音声を通訳することを考えていたが、器具



についている LED の小さなパイロットランプも、わずかな光であるが中では発光させられないことから、その使用も断念せざるを得なかった。)内部へは、全盲の方が案内する。その際真っ暗な中で大きな設備の全容を完全に把握できているのは言うに及ばず、まるで参加者が見えているかのようなコミュニケーションの取り方には学生も驚いていた。

施設の入り口から始めに入ったところでは、小石の敷詰めや、砂、本物の木を手触りで感じる。そして耳を澄ますと鳥の鳴き声、川を流れる水音も聞こえてくる。そのあと細い一本橋を渡らなければならない。左手に杖を持ちかえて右手で橋のロープをたどりながら進むが、揺れてかなり恐怖を感じる。次に船に乗って進む。風が吹いて水の音もかなりリアルで本当に船に乗っている疑似体験ができる。暗闇であるから船からの乗り降りも揺れて一苦勞である。また小屋のようなところへも入る。中にあるものに手で触れ何かを言い当てるように指示される。牛のようなものもある。後半は街中を歩くことを体験する。途中走らされたり大変怖い思いもさせられたりする。町の騒音の中、いろいろなものにぶつかる。車やバイクがある。信号も渡らなければならない。様々な店が開かれている。コーヒー豆や野菜? などいろいろなものを手で触る。そして最後に家の中にも入る。電話・か

がみ・帽子掛け・盲人用の地図などすぐにわかるものから説明を受けないと何かわからないものまで色々なものを触ってあてる活動をする。

正味1時間、完全な暗闇でかすかな光もなく、目が慣れてくることもない。

このような視覚障害に特化した疑似体験はイタリアではこの施設でしかできないと聞く。最終コーナーではいわゆるパール（喫茶店）が開店している。

ジュース、水、コーラ、コーヒー、ビールなど盲人のカミリエーレ（店員）が参加者の飲みたいものの注文を聞いて間違いなく注文した人に注文したものが届く。学生たちはまるで手品のような的確さに驚くと同時に、今度は自分たちが真っ暗な中で財布の中身を探しての支払いが大変難しいことを体験することになる。

視覚だけが閉ざされ、触覚、嗅覚、味覚、聴覚という感覚を最大限に研ぎ澄まして情報を集めなければ生きていけないことを自覚するこの1時間にわたる類まれな体験は、教育・福祉を学ぶ学生にとって、極めて貴重な経験となっただろうことは、事後の感想で十分に確認することができたのである。

3. 学生事後レポートのまとめ

帰国後、学生から提出されたレポートについて、記述された内容をまとめた（表・1）。なお、提出されたレポートは個人が特定されない形で内容をまとめ、報告として公表することについて説明し、参加学生全員の合意を得ている。「良かった」「感動した」「驚いた」「良い体験になった」という記述、および一般的な海外旅行でも体験できるような内容については採用しなかった。

表・1 記述内容のカテゴリー分類

＜代表的な記述（すべて原文を要約）と（ ）内の数字は人数。複数回答あり＞

【Casa Dei Bambini での研修で学んだこと】

- ・教師がこどもの自由を選択させること、見守ることの大切さ。(10)
- ・モンテッソーリ教育の優れた面は、子どもの自己価値を高めていくことや、興味のあることを探求していく姿勢を育てることができるところにあるが、子どもが他のことに興味を持てるように誘導していく教師の実力が問われることや、子どもの学習内容が偏るのではないかという懸念がある。(4)
- ・褒められるというよりも、子どもたちが自分の内面から自信をつけるこの教育は、日本の教育で今必要とされている「生きる力」を伸ばすことにも繋がるのではないか。(2)
- ・実際に子どもたちが使っているのを見て教具の使い方を知ることができた。(1)
- ・異年齢の子どもたちと一緒に育ち、互いに協力し合う環境の中で、自尊心が自然に育つという話を聞いて、とても衝撃を受け、きっと日本の教育方法も間違いではなく、大人が褒めることも自然に育つことも両方あって、どちらに注目したかで用意する環境が違ったのだろうと思った。(1)
- ・モンテッソーリ教育で良いと感じたことは、1年で終えなければならない学習をどのように進めるか、自分で計画を立てて生活することで、見通しを立てて行動できるようになるということ。また世界に1冊の自分だけの教科書ができ、子どもに達成感を与える事ができるということである。(1)

【Istituto Gonzaga での研修で学んだこと】

- ・日本の教育に少し近いということもあり、掲示物や先生の指導の仕方など、どこが違って日本にない良さはどこにあるかなども見ることができた。(8)

【盲人体験施設で学んだこと】

- ・五感を敏感にさせることも大切だと感じたが、それ以上に人の声や手の温もりを感じることができた。「ここに段差があるよ」といったちょっとした一言でも安心することができ、人の声かけは大切だなと実感した。たった1時間で盲目の人の気持ちが理解できたとは言えないが、少しは気持ちがわかり、手助けできるのではないかと思った。(5)

【英語の必要性和コミュニケーションについて】

- ・両校で共通していると思ったことは、英語教育の充実である。話を聞く中で、幼稚園の段階から英語に触れていたり、小学校では毎日英語の授業が行われていたり、日本よりもはるかに充実しているのではないかと思われた。実際、ゴンザガ小学校では高校生の子たちが学校を案内してくれたのだが、英語の知識は私たちより上であった。日本でも小学校3年生から英語活動が始まることになるのだが、もう少し早めることや、時間数を増やすことも今後考えていかなければならないのではないだろうか。(4)
- ・英語を学ばなければならない。英語を話せるようになってもっといろんな人と会話をしたいと思うようになった。自分の気持ちをきちんと伝えたい。(3)
- ・とっさに話ができるような英語の力をつけたいと思った。そのためには、ひかえめな日本人の美点は置いておいて、やはり、積極的な態度というのはとても大切になると感じた。(2)

【日本の文化について】

- ・折り紙をはじめ、漢字や日本語など日本の文化に興味を持ってくれていたことが本当に嬉しく、改めて日本の文化を誇らしく思えるようになった。(2)

【将来の教師像、保育士像について】

- ・小学校の教壇に立つとしたらモンテッソーリの素晴らしい教具は導入したいと考える。それは子どもたちの考え方は十人十色だからである。(5)
- ・勉強の楽しさを子どもに伝え、子どもの興味や関心を引き出せるような教師になりたいと思った。(2)
- ・子どもの気持ちをもっと理解することのできる教師になりたいという思いが強くなった。(1)

【自分の成長、今後に向けての意欲に関すること】

- ・一つの経験で終わらすことなく、今後の自分に生かすものにして、これからより一層熱心に勉強に取り組んでいきたい。(5)
- ・子どもたちと交流することで教師になりたいという気持ちが強まった。(4)
- ・自分の知識を深めることができ、人として大きく学ぶべきところがたくさんあった。(3)
- ・貴重な体験のなかで出会ったすべての感情を大切に、学んだことを忘れずに頑張っていきたい。(2)
- ・一緒に行った先輩方や、現地の人に自分から話すことができたり、笑顔で接することができたのではないと思う。これが自分の中で一番成長できたことではないと思う。(1)

Casa Dei Bambini での研修で学んだことについては、モンテッソーリ教育を実際に目の当たりにし、その教育の素晴らしさに感動するような記述が多かったが、一方で日本の教育の良さとも比較して考察する記述もあり、教育が子どもにどのような影響を与えるのかについて真摯に向き合う記述が多かった。また Istituto Gonzaga での研修では、教師の指導方法が子どもの意欲を引き出す点や教室内の掲示物の工夫などについて日本と比較しながら考察している記述が多かった。Istituto Gonzaga では学生自ら子どもたちに鶴の折り方を教えるという活動が中心だったため、子どもとのコミュニケーションから感じたことが多かったと思われる。英語の必要性和コミュニケーション及び日本文化について記述された内容は、ほとんどこの時の子どもたちとの関わりをもとに記述されたものである。両校の研修で得た体験から、**将来の**

教師像、保育士像について記述しているものも多かった。

盲人体験施設で学んだことは結果の通りであるが、ほとんどの学生が、自分の五感が敏感になること、人の声や手の温もりを感じたこと、人の声かけは大切であることなどを記述しており、日常では味わえない体験の素晴らしさを記述していた。

今回の研修では、様々なイタリア文化を体験したことも相まって、参加して良かったという類の感想が全員のレポートの記述にあり、**自分の成長、今後の意欲に関すること**に関しても全員が記述していた。

4. 国際理解測定尺度による質問紙調査結果

国際理解測定尺度（鈴木ら・2000）による質問紙調査を研修ツアーの事前・事後に実施した。

表・2 研修ツアー前後でのt検定の結果

	前		後		t 値	
	平均	SD	平均	SD		
共感性	26.5	1.93	27.58	1.92	-1.37	p<.10

無記名式の回答であったため、分析は対応なしのt検定により行った。その結果、すべての因子で有意差はみられなかったが、他国文化の理解に関連する＜共感性＞の因子では有意傾向がみられた（表・2、t (22) = -1.37, p < .01）。

国際理解測定尺度は、国際理解教育の基本目標を参考に作成されており、基本目標として人権の尊重、他国文化の理解、世界連帯意識の育成、外国語の理解の4点が挙げられている。そしてそれぞれの基本目標ごとに具体的目標が挙げられており、この具体的目標に沿った質問項目で構成されている。

今回の調査では、研修ツアーの内容からしても、人権の尊重や世界連帯意識について、学生の考え方に大きな変化を与える機会はなかったと考えられる。外国語の理解については、具体的目標として＜理解＞と＜関心＞の因子から構成されている。短期間の研修では外国語の理解に大きな変化は望めないだろうし、外国語の関心については、研修ツアーに参加したいと希望している時点で、もともと関心のある学生が集まっていると考えられる。

他国文化の理解については、具体的目標として＜理解＞、＜関心＞、＜共感性＞の因子から構成されている。＜理解＞と＜関心＞については外国語の理解と同じ考察ができるだろう。しかし、＜共感性＞については有意傾向がみられた。＜共感性＞を構成している質問項目は（*印は逆転項目）、「各国に見られる独自の習慣を尊重したい」「外国の伝統芸術をすばらしいと思うことがある」「他国の文化を理解したいとは思わない（*）」「異なる文化に触れることは、

興味深い体験だと思う」「日本とは異なる習慣を持つ国の人々は理解できない（*）」「原始的な生活をしている民族は、近代的な生活様式に変えた方がいいと思う（*）」の6項目である。これらの質問項目は、今回の研修ツアーの目的、つまり学生に身につけてほしい内容と合致しており、参加した学生は、研修ツアーの目的に沿ったプログラムを素直に消化する傾向にあったと分析できる。

鈴木ら（1999）も本尺度の作成にあたり、「他国、他民族、他文化の理解においては、世界文化の多様性、価値観の多様性を受け入れる共感的な理解（他の人々、特に異なる文化や状況にある人々の感情や視点の想像）が重要だと考えられている」としている。他国文化への共感性を持つことは、学生たちの国際理解を深めることにつながり、今後の学生生活や社会生活、また進路選択にも様々な影響を与えることになるだろう。

ただ単に外国に行っただけで他国文化への共感的理解が育成されるとは限らない。今回の研修ツアーでは、現地の子どもたちや教員たちとの交流を通じて、相互に受け入れ、受け入れられる体験ができた。能動的に相手に受け入れられようとする行動、期せずして相手から温かい歓迎を受けた体験は、相手に対する共感性を高めることにつながったと考えられる。また引率教員による安全面の確保と綿密な行動計画により、海外滞在で起こりやすいネガティブな体験を得にくかった、あるいはネガティブな体験をポジティブに捉えなおす場（研修場面ごとの終わりの会）の提供があったことも、他国文化に

対する受容的な共感性を育んだとも考えられる。

このような様々な要因から、学生たちは異質なものを排除するのではなく、異質なものを受容したいという態度を促進させる傾向がみられたのではないだろうか。

<引用文献>

鈴木佳苗ら(2000), 国際理解測定尺度(IUS2000)の作成および信頼性・妥当性の検討, 日本教育工学会論文誌, 23(4), 213-226.

鈴木佳苗ら(1999), 国際理解測定尺度の作成(1) — 項目の作成および決定 —, 日本心理学会第63会大会発表論文集, 1013.